

秋ギクの切り花品質向上のためのかん水法

園芸部野菜花きグループ 小早川 洋美

研究紹介



野菜等で行われている養液土耕栽培では、根圏が養液の滴下位置を中心に発達するため、養水分のコントロールによる生育の制御が容易となります。また、施肥量を軽減できるため、環境にやさしい栽培法であるといえます。そこで、秋ギクの切り花品質を向上させるために、養液土耕栽培における水分供給方法について検討しました。

かん水法の違いと品質

秋ギクの主力品種である‘神馬’‘精興の誠’‘秀芳の力’を用いて、従来の散水パイプによるかん水栽培（慣行）と比較しました。その結果、養液土耕栽培では生育期間全般を通して、養水分を適正に供給できることから、草姿のバランスが向上しました。また、立葉性の‘神馬’では差が見られませんでした。立葉になりにくい‘精興の誠’‘秀芳の力’では、秀品率が慣行栽培に比べ高くなりました。（図1）

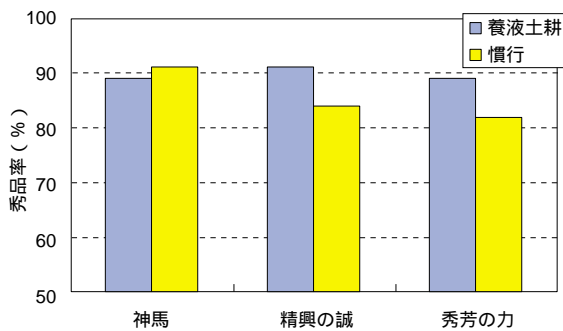


図1 かん水方法の違いが秀品率に及ぼす影響

かん水量の増減による品質の向上

生育期間を通してかん水量を増減したところ、‘精興の誠’の発根苗定植栽培では、かん水量を標準または増加させることで茎が肥大化し、切り花品質が低下しました。（図2）しかし、直挿し栽培では標準のかん水量でも茎は肥大化せず、かん水量を少なくすると草丈の確保が難しくなり、秀品率が大きく低下しました。‘神馬’では、かん水量の増減による秀品率の低下は認められませんでした。（表1）このことから‘精興の誠’はかん水量の影響を受けやすく、‘神馬’はかん水量の影響を受けにくい特性が

あると思われます。

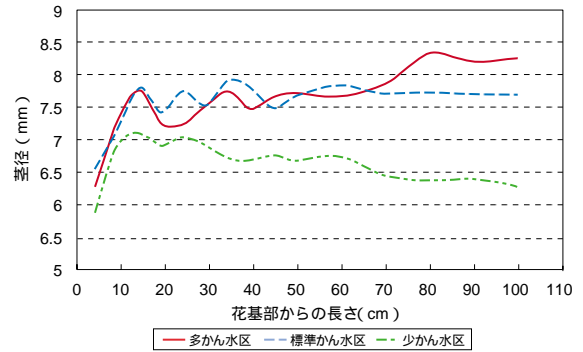


図2 ‘精興の誠’における発根苗定植栽培でのかん水量と茎径との関係

表1 かん水量の違いが切り花品質に及ぼす影響

品種	苗の状態	かん水量	草丈 (cm)	調整重 (g)	秀品率 (%)
‘精興の誠’	発根苗	多(2割増)	132	90	89
		標準	125	82	83
		少(2割減)	111	73	78
	直挿し	標準	97	76	83
		少(2割減)	87	74	46
‘神馬’	発根苗	多(2割増)	120	88	91
		標準	120	93	90
		少(2割減)	99	82	86

普及上の留意点

この試験は、砂壌土での結果であり、粘質土でのかん水法については、再度検討する必要があります。



図3 養液土耕栽培の状況